

第三部 救い

問21 救われるとは、どういうことですか。

答 人生の途上で実際に危険や苦難に出会った時、そこで滅びることなく守られ、支えられて無事そこから脱出することができるとを救われるという場合があります。たとえば、昔イスラエル人はエジプトで奴隷でしたが、モーセによって導かれ、自由の天地にのがれることができました。つまり彼らは奴隷の境遇から救われたのでした。

しかし、聖書はさらにその意味を深めて、罪から救われること、すなわち、罪にとらえられている人間が、罪から完全に解放され、身も心もきよめられて新しい人間となり、イエス・キリストと同じ人間性にかえられるということをさしています。(ローマ六・四―一、コリント第二、三・一八、ヨハネ第一、三・二)

神はこのような救いを人間に示されましたが、その完成は終末の時とされましたので、それまでは、わたしたちの救いは不完全であり、まだ完全に聖化され浄化されることはできません。ですから、わたしたちは今は、この約束を信ずることによって、希望に生きるのです。(ロー

マ八・二三―二五)

このように、わたしたちはまだ完全には救われていないというよりほかないのですが、しかし、神は現在すでに、このようなわたしたちをゆるし、そのままでうけ入れ、愛して下さいます。そう知らされる時、この私は救われている、という喜びがわいてきます。未完成な者であるのにもかかわらず、このような希望と喜びにあずかれるということが、この世にあって救われるということなのです。

問22 信者になっても、しばしば罪を犯すことがあります。それでも救われているのでしょうか。いったい、救いの確かさはどこにあるのですか。

答 すでにのべましたように、わたしたちは救いの途中にあるのです。完成はまだです。ですから、しばしば罪に負けることもあり、その点ではわたしたちはまだ救われていないといわねばなりません。ここにわたしたちの最も深いなげきと求めがあります(ローマ八・二三、ピリピ三・一〇―一四)。このことは、わたしたちが自分の救われていることの確かな証拠をわたし自身のうちにはもっていないということを意味していますか。

しかし、わたしたちが救われているという、もったも、たしかな証拠が唯一つあります。そ

これは神がこのようなわたしをうけ入れ、救おうと決意し、予定しておられるという神のがわにおける事実です。つまりわたしが救い（キリスト）をとらえているのではなく、救い（キリスト）がわたしをとらえて離さないという事実です。

実に、救いはわたしたち人間の願望であるよりも神の意志なのです。ですから、いくたび罪に失敗してもこのキリストのみ手が、わたしたちをひきもどして、救いに導くのです。（ヨハネ一五・一六、ピリピ三・一二）

問23 救われるためには悔改めねばならないといわれますが、それはどういうことですか。

答 ^{「悔改め」とは} 悔改めるとは、神から離れ、自己のみを追い求めていた人間が、再び神にたちかえる、ということとをさしております。すでにのべたように、神は罪深いわたしたち人間のために、救いを用意して忍耐強く待っております。神にさからうこの罪人の上にも、なおめぐみ深くあられる神に、かたくなな心を打ち砕かれ、すなおに立ちかえって恵みをうけ入れ、まごころをもつてこれに応答したゆこうと決心することが、悔改めであるのです。神はたちかえらるる。悔改めることによつて、神の救いはわたしたちの中に実際に始められるのです。なぜなら神

のために多くの苦しみをうけられました。その全生涯そのものが神の意志や、神そのものをあらわしております。しかし、特に、最後の十字架の死と復活という出来事によって神は決定的にご自分を全人類に啓示されたのです。(使徒四・一二、ローマ三・二五、ヘブル一・一二)

問25 イエス・キリストの十字架の死は何を示していますか。

答 この世的にみると、イエスの死は、当時の権力者や宗教家の策略によって、殺された敗北の死のようにみえます。しかし、正義という観点からみるなら、イエスは全く無実であり、このようなイエスを十字架においやることによって、自分たちの主張や立場の安全を守ろうとしたひとびとこそ、その罪、その死に値するといわねばなりません。そこでは正しい人が死に、悪いひとびとが生きています。しかも、この誠に不条理な十字架のさなかで、イエスは「父よ彼らをゆるして下さい」と祈られました。イエスの死をめぐって罪を犯したのは、彼の敵だけでなく、総督ピラトや群衆、そして弟子たちさえも同じでした。つまりそこでは、全人類に共通する人間の罪がはっきりと現れているのです。

いうことです。イエスは復活によって死のもっている呪いという性格を滅ぼし、克服し、死に勝利されたのです。復活によってはじめて十字架の救いが完成したのです。

ですから、十字架の死がイエスによってわたしたちの代りになされた死であったように、イエスの復活は、わたしたちのためにかち取られたわたしたちの復活であります。わたしたちはイエス・キリストにおいて新しい生命に生かされることが出来るのです。

もちろん、この世で肉体をもっている間は、私たちは、依然として古い人間であり、死の下にあるのですから、キリストの復活の生命に生かされるのは、ただ、聖霊と信仰によります。しかし、わたしたちが古い自分に完全に死に、新しい、永遠の生命に完全によみがえり、朽ちはてぬ栄光の体をうける時がやがて来ます。キリストの復活は終末におけるわたしたちの復活の典型であり、前例がありません。したがってそれはわたしたちの希望であります。この復活の生命はどのような絶望の時にも、わたしたちを生かす力であります。(コリント第一、一五・二〇—二二、コリント第二、四・七—一一、エペソ二・五—六)

問27 キリストは再臨されるといわれますが、どういうことですか。

答 キリストは復活後、昇天して、今神のもとにおられるので、わたしたちは今キリストを見ることはできませんが、やがて、必ずもう一度この世に来られるということです。

その時がいつであるかは、だれも知ることができませんが、再臨の時は、すなわち、世の終りであります。彼はその時、生きている者と死んだ者すべての者の最後の審判をされるのです。

しかし、この最後の審判をなさる方が、みずから審きを代りに身に負われたキリストであることを忘れてはなりません。彼は、あの十字架において示されたすべての人間の審きを、ひとりびとりの身に実現されるでしょう。そして同時に、あの復活において示されたすべての人の復活を、ひとりびとりの身に実現して下さるでしょう。

世の終りにわたしたちの死と復活が起こることとは、救いの完成ですから、大いなる慰めといえます。わたしたちはキリストへの信仰において、喜びと希望をもって再臨を待ち望みましょう。(コリント第二、五・一〇、ヨハネ第一、三・二)

問28 イエス・キリストは人であって同時に、神であるといわれ、また、主とか、神の子とかよばれますが、どういう意味ですか。

答 イエス・キリストが完全なひとりの人間であったということについては、異論はないと思います。彼はわたしたちと同じ肉体をもち、弱さをもち、誘惑をも受けられました。しかし、彼は罪を犯すことはありませんでした。その点でわたしたちとちがった完成された人間性をもっておられたのです。(ヘブル四・一五)

そして、彼は地上の生涯を通して、わたしたちのために十字架に死に、復活されたのですが、それは単にひとりの人間が死に、復活しているのではなく、実に、神ご自身がそこにあらわれ、それをなしておられるのだということ、わたしたちは知るのであります。つまり、神は、イエスの中に宿り、イエスにおいて自らをあらわすことによって、人間の救いを成就されたのです。ですから、イエス・キリストは「人にして神」といい、イエスにおける神のかたちを「神の御子」または「神の独り子」と申します。だから、神の御子というのも、神ご自身と同一であります。(ヘブル一・三)

このような教理は、人間の理性を超えた神の秘義をあらわしております。これによってわたしたちはイエス・キリストが罪と死の力からわたしたちを解放し、「神の子」としてご自分のもとにうけ入れて下さることを知らされ、イエスを主とよび、感謝と喜びをもって従い仕えることができるのです。(コリント第一、一五・五五―五七、ヘブル二・一四)

問29 イエス・キリストという名前には、どんな意味があるのですか。

答 イエスとは生まれた時つけられた名前で、それは「神は救なり」という意味をもった、ごく一般的なユダヤの人名であります。

キリスト（ヘブル語ではメシヤ）とは、王、祭司、予言者の職責を果たす者として神より特別に選ばれ、任命され、そのしるしとして頭に『油を注がれた者』という意味で、イエスこそそのキリストであられたのです。

実際に、イエスは比類のない仕方でもキリストの三つの職責を果たしておられます。すなわち、すべての人のしもべとして仕えることよって、王として、すべての人を霊的に支配し（マタイ二〇・二五―二八、ヨハネ一三・一一―一五）、また、大祭司として、自らが犠牲となってわたしたちを神にとりなし、和解を与えて下さり（コリント第二、五・一八―一九、ヘブル九・一一―一五）、さらに予言者として、神の救いをのべ伝え、教え、完全に神の御旨を啓示されたのであります。（マタイ七・二九）

問30 人間が救われるのは、自分の力によるのではなく、ただ、キリストのめぐみによるとい

ことは、どういうことですか。

答 人間はだれでも自分の力によって罪にかち、悪にかち、死にうちかち、救いの安心を得ようとうします。この世には自分にそのような力があると信じて生きる人、つまり人間の道徳力や文化創造力や理性の力を信じるひとびとと、これを説く宗教がみちています。しかし、そのひとびとはまだ、人間の罪の深淵というものを知らないのだと、いわねばなりません。

わたしたちは、聖書における神のことばを聞くことによって、鋭い良心と深い洞察力が呼びさまされ、思い上った自己信頼が砕かれ、このような自己を信頼していたことが、すなわち罪であったことを示されます。こうして、まず自分に絶望し、悩むことによって救いへの道を見出すのです。(ローマ七・七一―二四)

自分がよいことをしようとしても、徹底的には出来ず、人を愛するといいいながら実は自己を愛している自分に気づく時、人は自分の力ではどうすることも出来ない罪人の姿を知るので、そして絶対者である神の子、イエス・キリストに頼る以外には救いのないことに気づきます。すなわち、人間的には何一つ救われる価値のないわたしたちのために、生命を捨てて十字架の死に至るまで愛して下さるキリストを、神のただ一つの救いの方法として、恵みとして、これを信じ受け入れる以外に救いはないのです。

人はそのおこないによって救われるとするのは、文化的な考えであり、律法的信仰といえます。これに対し、神の恵みによってのみ、救われるとするのを福音的信仰といいますが、この福音的信仰に至らなくては、人はほんとうの救いの喜びをあたえられることはできません。

(ローマ三・一九―二八)

問31 神の福音が与えられるのに、なぜイエス・キリストの出来事がなくてはならなかったのですか。

答 その質問の背後には、神の真理や愛は、キリストの出来事がなくても理解できるのではないかと、という精神主義的な考えがあるようです。しかし、神の福音の内容とは、ただ、神が人間をこういふふうにして救おうと考えられたというのでなく、人間の救いのためにそれを実行されたということに注意せねばなりません。

つまり福音とは、神の言葉や思想やまたは教理ではなく、神の行動なのです。神は天上において気持の上だけでわたしたちにあわれみ深い思いをもっておられるのではなく、イエス・キリストにおいて肉体をとり、地上に降りてこられ、罪ある者たちの近くにともにあり、そして

現実に人間の罪を救うために十字架の死と、復活をとげられたのであります。

ここにリアルな神の真理と愛があるので、この出来事があったからこそ、わたしたちは現実に神がわたしたちと出会うとおられることを知り、力を受けるのです。

ですから福音は、真理と出来事、思想と行動として分離することはできないのであります。もし救いのために、イエス・キリストの歴史的事実性を軽んじるとしたら、それは現実味の無い観念的なものとなってしまおうでしょう。(ヨハネ第一、四・一―三)

問 32 親鸞は人は難行によらず弥陀の慈悲によって救われると説きました。それはキリストの福音とたいへんよく似ているように思われますが、どこがちがうのですか。

答 親鸞の説いた他力本願の教えは、きわめてすぐれたもので、キリストの福音に近いものといえましょう。人間を無力なものと考えることに於いて、救いは他力によると考えることにおいてほとんど同一であります。しかし、慈悲深い弥陀というのは、親鸞がその深い宗教的天才の力をもって見出した超越者の姿であって、歴史的出来事を通して啓示されたものではないのです。そのため弥陀の慈悲は歴史の中での実際の事実と結びついていないし、行動ともなっていない。

いません。それは深い思想ですが現実性が足りないのです。つまり、その慈悲にはキリストの十字架のような、血を流した現実とのとりくみがないのです。ですから、浄土真宗は現実逃避の傾向を本質的にもっておるのです。

前の問で述べたように、キリストの福音にあっては、神の慈悲は、イエス・キリストにおける神御自身の贖罪苦と復活と分離することはできません。言葉と行動がいつもかみ合って、現実性をにじみ出しております。親鸞にはこれがないのです。

問33 二千年前のイエス・キリストが今日わたしたちに、生ける神との出会いをあたえるというのはどうしてですか。

答 神は、かつてイエス・キリストにおいて、ただ一回、比類のないしかたで人間となり、働かれました。その出来事はすでに過ぎ去りましたが、その時の出来事の証言である聖書が書きのこされました。わたしたちは、この聖書を通して、イエス・キリストに接するのです。

ところでわたしたちは、聖書の中に単に過去のキリストをよむのでしうか。そうではありません。聖書をよんでいると、ふしぎにもその言葉は時間と空間のへだたりをこえて、現実と

なり、過去のキリストが現在のキリストとなって、わたしたちに語りかけ、救いをあたえられ
るといふ出来事を起こすのです。つまり、昇天して今神の右におられるキリストは、聖書を通
してわたしたちと交わられるわけで、このようなことは、聖霊の働きによるものです。

問 34 聖霊とは何ですか。

答 霊というと、人はよく自然の中にあるふしぎな生命、生氣、精霊、などを想像します。ま
た、よく自然の中で靈氣にうたれるなどともいいますが、しかし、これらは神の靈（聖霊）で
はありません。また、しばしば神にのりうつられるという、神靈術とか靈媒とかいいますが、
それも聖霊とは何の関係もありません。

聖霊はかつてイエスとともにあった神の靈のことで、主イエスの復活後、約束のとおり弟子
たちに与えられて彼らを立ちあがらせ、ペンテコステ以来、教会の中にとどまって信徒を生かし
キリストの御業をおこなって来たのです。そして、聖霊は今日も働いて、みことばを通して日
毎に教会にきたり、わたしたちの心をみだし、キリストを心の中に証しし、その恵みときよめ
にあずからせ、信仰と希望と愛をわたしたちの中に生み出し、救いを完成してゆくのです。

(ヨハネ一四・一六―二六、使徒二・一―四、コリント第一、一二・一―一一、ガラテヤ五・二二―二三)

問35 聖霊を受けるには、どうしたらよいでしょうか。

答 聖霊はイエス・キリストにおいて自らをあらわした神の靈のことですから、イエス・キリストをぬきにしては、知ることも、受けることもできません。そしてキリストは、ただ聖書と教会を通して知らされるのです。そこで過去のキリストが現在の生けるキリストとなつてわたしたちに出会われ、悔改めと新生を与えて下さるのです。これが聖霊経験であります。聖霊を受けなくては、キリストに関する知識は力とならず、生命となりません。(コリント第一、一二・三)

わたしたちは聖霊の与えられることを熱心にこい求めねばなりません。そのためには、求めるものには必ず聖霊をあたえられるとの、期待をもって聖書をよみ、教会の交わりをなし、祈りの生活をするのがたいせつであります。そのような生活をする時、必ず聖霊は与えられるのです。(ルカ一・一三)

問36 神を父・子・聖霊なる三位一体の神といいますが、三人の神がいるのでしょうか。

答 問14で申しましたように、神は永遠に唯一であります。しかし、この神は天上に静座しておられるのではなく、人間の歴史の中で実際に活動し、救いを完成される方であります。

すなわち、神はまず天地の創造主（父）として、次にイエス・キリストにおいて罪人との和解者（子）として、そして、最後にひとびとの中で救いを成就する救済者（聖霊）としてあらわれてみわざをなし、こうしてその救いのわざを貫かれるのです。

ですから、三位一体とは、その名と働きがちがう三人の神が別別におられるということではなく、ひとりの神が一つのわざを完成するにあたって、父として、子として、聖霊としてあらわれて働かれたという事で、神がこのような形で自らをあらわし、みわざをなされたということです。いはば神の秘義に属することであり、したがって、三位一体とは、人間が考えだした神の説明ではなく、イエス・キリストにおける神にささげた讚美、頌栄のことばなのです。（コリント第二、一三・一三）

問37 人間は死後どうなるのですか。

答 聖書は、人はすべて、自分のおこなったことに応じて最後の審判をうけねばならないと教えています。これは、この世におけるわたしたちの生活がうやむやに葬られたり、死とともにひとりで無に還元したりするのでなく、やがて厳密な責任を問われるということの意味しています。つまり人間は、動物や自然物とちがって責任をもつ道徳的主体であるということであり、この世では、善人が苦しみ、悪人が栄えるということもあり、いろんな不合理があつて、いったい、歴史や人生には意味と目的があるのかどうかわからなくなることがありますし、また死んだらおしまいだといって、いいかげんにごまかして平気になつてしまうこともあります。しかし、神は見ておられます。神はわたしたちを終りの日、審きの座に立たせられるのです。

ところでこのきびしい審きに耐えうる人間がいるのでしょうか。おそらくひとりもいないでしょう。厳密な意味では義人はひとりもないからです。ではどうしたら救われるのでしょうか。最後の日、わたしたちを救うのはただキリストのめぐみだけです。(コリント第二、五・一〇)

問38 永遠の生命とは何ですか。

答 それは肉体的に不老不死でありうるような生命のことでもなく、また単に肉体的に死んでもなお続く不滅の靈魂といったものでもありません。そのように生れながらの人間が現に肉体的、あるいは精神的に所有しているものではなく、神によって与えられるまったく新しい第二の生命であって、愛において働く生命であります。この生命こそが永遠なのです。罪にそまった人間の生命はそのまま永遠不滅であることはできません。それは神の国をつぐことができず、一度死なねばなりません。(コリント第一、一五・五〇―五五)

しかし、まことの永遠不滅の生命は神によってこの死すべき人間にあらたにあたえられるのです。その生命は、まったき姿では世の終り、死人の復活によってあたえられるものですが、しかし、キリストを信じる者の中ですでに始まっております。(ヨハネ三・一六、五・二四)

問 39 「靈魂の不滅」と「永遠の生命」とはどちらがいますか。

答 靈魂の不滅という場合、その靈魂とは、人間の中にある靈魂をさし、それは肉体は死んでも、肉体を離れて永遠に存在しつづけるものであるということを意味しております。したがっ

てその靈魂とはすべての人の中にある汎神論的な靈のことです。

しかし、問37でのべたように、人間は道徳的責任の主体であります。そして、人間の靈魂も肉体とともに行為の責任者であります。したがって肉体はきたないが、靈魂はきれいだということはできません。この主体としての「わたし」というものから離れた靈魂というようなものは存在しません。

ですから、靈魂も最後の審判の日に神の審きの座に立たねばならないのです。そしてこの審きに耐えうるような靈魂はありません。ことごとく滅び去らねばならないのです。ですから靈魂は不滅とはいえないのです。

しかし、わたしたちは、この審きの時に、恵みによって復活させられ、新らしい第二の生命を与えられます。これが永遠の生命なのです。

問40 「神の国」とか「天国」とかいますがそれは何ですか。

答 神の御旨みむねが完全に行なわれる世界を神の国あるいは天国といいます。この世には罪と悪とが存在し神に反逆する勢力が働いており、わたしたち自身もそれにかなり侵されています、

この世は神の国に連続しているとはいえませんが、神の国はこの世をこえたところ、つまり、この世の終末に現れ出る新しい第二の世界であります。私たちは罪ある者として滅び行くこの世に住んでおりますが、神の恵みによって、その来たるべき神の国によみがえる約束を与えられております。

しかし、未来の国である神の国は、イエス・キリストの到来によって、霊的な姿において、すでにこの世のただなかに来ているのです。わたしたちは、現在古いこの世の中におります。が、霊的にはすでに神の国の中に入れられておるのです。(マルコ一・一五、ルカ一七・二〇—二一)

(附) 地獄とは何ですか。ほんとうにあるのですか。

答 地獄とは最後の審判の後に来る、神から完全に見離され、罪と悪のとりこになってしまった永遠に呪われた世界のことです。そしてキリストの救いを信じない者はこの地獄に落ちて行きます。

また、地獄の姿は天国と同じようにこの世の中にも反映しております。使徒パウロが「わた

しは自分の欲する事は行なわず、かえって自分の憎む事をしている……わたしは、内なる人として神の律法を喜んでいますが、わたしの肢体には別の律法があつて、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ七・一五―二四)といっていますが、このような罪に負けている人間の姿は、まさに地獄の中の人間といわねばなりません。

しかし、つづいてパウロが「わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな」といっていますように、この世の地獄の中にある者を救うためにこそ、神はキリストをつかわされたのです。つまり地獄の中にも神の手はさしのべられているのです。(詩篇一三九・八、ルカ二三・三九―四三、ローマ一・三二、ペテロ第一、三・一八―一九、黙示録二〇・一四―一五)